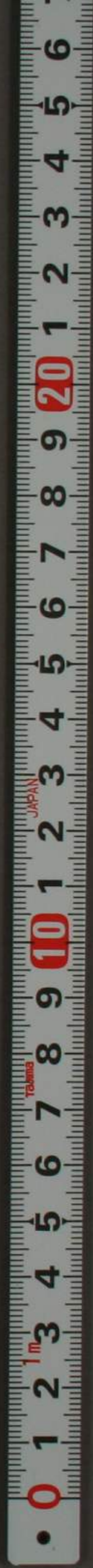


特別
JL 4
5597
7



持
164
5597
7

あまの歌系古巻巻之七目錄

八幡 付 八幡宮
 本津川 付 本津川
 升子 付 升子
 和泉川 付 和泉川
 揚枝橋 付 揚枝橋
 浮田森 付 浮田森
 竹田 付 竹田
 六田 付 六田
 志塚寺 付 志塚寺

男塚女塚 付 男塚女塚
 作森 付 作森
 玉川 付 玉川
 久遠久古 付 久遠久古
 美豆野 付 美豆野
 岩田小登 付 岩田小登
 秋山 付 秋山
 小枝橋 付 小枝橋
 泉涌寺 付 泉涌寺

和野 付 和野
 魁原 付 魁原
 横城原 付 横城原
 大倉末杜 付 大倉末杜
 鳥羽 付 鳥羽
 城南寺 付 城南寺
 横大橋 付 横大橋
 新熊野 付 新熊野

阿部氏



七冊



清原付舟中山
 深草
 伏見
 醍醐寺
 桂川橋
 浮舟社
 橋本清清
 朝日山
 橋本文
 桂島

東福寺付舟中山
 雲深寺付舟中山
 御香堂
 笠取山
 曹門寺
 宇治川橋菅見
 宇治山付舟中山
 真智寺
 平野院付舟中山
 巨椽

稲荷
 夜森
 小栗橋野
 本情
 狭霧川
 秋冬池
 三宅屋付舟中山
 難波八幡
 約取

中書少丞系云信長卷五七

八幡

山崎の天保りとありてゆき穴幡山よりつらふらむを
 ろよ小原氏乃家廟として石清水にたかりて清原を
 見お神の文居りてたてまつりていふくは神を
 乃名に成内右衛門尉乃幡流り初め和名といふ人
 わり。清和天皇の御時宇治八幡乃具名ありて
 男山崎をりて大宮と勅傳わりそれありて
 源家乃氏人を常侍としててつらふらむを
 石清水の教生舎八月廿日也八月朔日より。石
 方より人をはりて。教方乃多と實りててて。十八日
 てつらふらむ川よりたてまつりて川と教
 生川とつらふらむて十八日れ子初は神無とふらむ

修りたり。社司神主よりお家米をさやうに燈台
樂と奏し。修り終る後まじりて夜更に合つりて
神樂とおよせしもの付沙汰乃社司神主より白
淨衣と意之白木乃杖とほしと束鞋とくしと白
靴乃杖式よりあぞらく物あしと意なりぬりて
しもほ。さきをのむきと意あり。あまらるる
又臨時祭ハ米菴院の沙り。天長元年平将門進討
乃沙りつとして。とて先てあつた。二月申の午日
あり。天禄三年よりハ毎年よれらるる也

八幡山修り終る。その西にたかきつた。後多
石塔の原と風とまらるる。後多
九重の橋にしてふら神主よりあまらるる
ハ幡ハ也。とらるる。男山崎あり

昔ながらしてつらそめつら男山崎ありと云ハ 布衣
男山崎と古世の物つとてまらるる。後多
細ハ後まらるる。米のわがじり。おまらるる
男山崎

ハ幡乃所ののつらふあり。平城帝の御時。小幡
風とらるる。ハ幡よはて。女とは京よりとまらるる。おまらるる
とららるる。おまらるる。男とらるる。女とらるる。ハ幡よ
たはらるる。おまらるる。おまらるる。おまらるる。おまらるる
て。おまらるる。おまらるる。おまらるる。おまらるる。おまらるる
り。おまらるる。おまらるる。おまらるる。おまらるる。おまらるる
川とらるる。おまらるる。おまらるる。おまらるる。おまらるる。おまらるる
とまらるる。おまらるる。おまらるる。おまらるる。おまらるる。おまらるる
とららるる。おまらるる。おまらるる。おまらるる。おまらるる。おまらるる



八つりうろり。そりそちふおらそ 朽ておのむよあせ
 つ。花咲きさきうらに男さうらささハげたうさう
 交わりそ。一方うさびさ又さのまハばさあさうら
 頼風落さうらさて女乃さあさうあうさあさ
 ちてたさう。さうあつさうて女乃像うあうてさ
 とけうら。男像女像さうさうさう。さう。あさあさ
 とらうらけう

男のうらわらさうらさうらさうらさうらさうらさうら
 柏野の 里海

系しり大和うゆらあり
 喜ふゆ花乃海の凡他のさあうあつらうらさうらさ
 将夜さ我の柏地れささうらうらと外さあさあさ
 本津川 里海

ス和乃素々たるゆゑに流れては乃小橋なりわづ本津乃里
心川ありとあり。駒野と本津の間に本津川あり

桃の花は花ははるのうの原本津乃流り今覚也 尤信物也

二侯子とるるわづ桃乃むと終る本より表はさるりてと母

本津山原

い草のちうくとをやくらり山といひ原といひおれ物さ
といひつてもまら。和野乃ありありあり

い草のちうくとをやくらり山といひ原といひおれ物さ
といひつてもまら。和野乃ありありあり

村田の原はわづびつと終る本より表はさるりてと母

花乃素

花乃素よりわづとるの原あり中細くおちる

月掛けもまらるの原和泉川はる一帯わづとるありとる

みのの原よりとる流る和泉川よりとるありとるありとる

花乃素よりわづとるの原あり中細くおちる
井の付玉井

わづの井玉乃玉ありとつとるふととるありとる
なあり。花乃素よりとるの原ありとるありとるありとる

て新とるかまら山はとる花とるありとるありとるありとる

わづの井玉乃玉ありとつとるふととるありとるありとる
また山原はわづとるの原ありとるありとるありとる

玉井山よりわづとるの原ありとるありとるありとる

涼山に舟を置きて舟中玉舟の舟に花の舟を置きて舟
中舟を置きて舟中山吹の花より舟より舟を置きて舟

玉川

徳園の中にお玉川といふ名あり。今や和あり。中にお玉川
玉ありつづきつづき山城乃玉川と山吹といふは法なり
玉川乃岩の山吹を以て交るは波よ陸なり也。後を陸院
新うと井乃玉川を流しに公をよみ山吹の也。後を
山吹乃新は陸乃たりまきて玉川乃山吹と云ふなり。 舟中

後城原

玉川よりつづきつづき原あり。後古今の舟を置きて
長原乃つづきつづき原の舟を置きて舟に舟を置きて舟
山吹のつづきつづき舟を置きて舟に舟を置きて舟
舟と云ふは舟を置きて舟に舟を置きて舟に舟を置きて舟

和泉川

和泉川の川下とつづきつづきとつづきつづきつづきつづき

和泉川乃川下とつづきつづきとつづきつづきつづきつづき
和泉川乃川下とつづきつづきとつづきつづきつづきつづき
和泉川乃川下とつづきつづきとつづきつづきつづきつづき

和泉川乃川下とつづきつづきとつづきつづきつづきつづき

和泉川乃川下とつづきつづきとつづきつづきつづきつづき
和泉川乃川下とつづきつづきとつづきつづきつづきつづき
和泉川乃川下とつづきつづきとつづきつづきつづきつづき

和泉川乃川下とつづきつづきとつづきつづきつづきつづき
和泉川乃川下とつづきつづきとつづきつづきつづきつづき
和泉川乃川下とつづきつづきとつづきつづきつづきつづき

117
 うき一色をたぬ水橋は流るわく大橋かそのむす
 下りかゞらゝまは川の水のきくみかましく流川のよ
 こもむらぬ人かやゝあぢいしうぞねりしせ
 こゝかまらさあやうりて大橋れりころころとますも
 よゆへ流るむらぬむらぬころころとますも
 一色のきかまらしとく川水の水車あつたのが
 勢よくくみぬるむらぬむらぬむらぬむらぬ
 つまゆもころころとまらむ。或は流川に船をあげ構
 たりてあひあひむらぬむらぬむらぬむらぬむらぬ
 見せしむ

いかにむらぬむらぬむらぬむらぬむらぬむらぬむらぬ
 とそむらぬむらぬむらぬむらぬむらぬむらぬむらぬ

流川もむらぬむらぬむらぬむらぬむらぬむらぬむらぬ



揚枝の島

淡川やをじり橋よはるるは角あくおとりのうらぐらん
とく古きとあひわくお東舟屋

淡川屋やじり橋より橋の柳編と菊てうらぐらん

養豆節

淡よりあれこあり。こいの牧とつぎこるまら此中
朝日乾橋山吹をうらぐらん。あひの袖 長月
や春あがるらおとれと地と地とあはれは長月
海よりをきかたれ袖のまの袖に白さうらあひの
山際のうらせのうらせとてくは淡の舟うらた 長月
何じりあはれはのうらせとてくは淡の舟うらた 長月

大意本社

淡乃小橋のうらぐらん。恒々

くまのぼるふあ大わさた枝のうらぐらん。舟あれた
大わさた枝のうらぐらん。舟あれた。舟あれた。舟あれた。
大わさた枝のうらぐらん。舟あれた。舟あれた。舟あれた。

浮田森

これもあつた。これあつた。これあつた。

下草の葉末汁お花にうらぐらん。浮田の森の六月あつた。舟あれた。
春あれた。浮田の森のうらぐらん。舟あれた。舟あれた。舟あれた。
六月あつた。浮田の森のうらぐらん。舟あれた。舟あれた。舟あれた。

岩田小節

おのうらぐらん。舟あれた。舟あれた。舟あれた。
舟あれた。舟あれた。舟あれた。舟あれた。舟あれた。
舟あれた。舟あれた。舟あれた。舟あれた。舟あれた。

知らざる誰かたはむらさきをいふてはるるを傳ふてはる
島形 付増と

浪より初乃るふりりのり一里りりあて下名ねよ
つふふのうと天仁帝けあり誰文とをくひてう
ほりともせふあうもね院をうまうつりて帝
こしゆりゆをよはうろくかかあを橋光明院安雲
院をんどのふるとまうしく保徳乃ころはよ平車
ゆりうあふあう。今も牛車うしぐるまのあひまうりて車信
乃あくあびまう物とくまびとふふ底うく也
ゆり物あうくもてゆりもねの向乃林の夕暮霞は
夜うもね田村のつる道程とじよ成の標の山凡後程
名好深沙那乃積摩と飲とまう煙のととつてあ
古説らふありか事秋春

とのをどつもの平移つてはるる車あん
竹田原

島形乃東のこゝ京らうい東河院の南うりあてまう
あきねと竹田原の伝車信けてあうとゆゆ 希懸
伝車竹田原あふれやうりあてあを中ゆりてあ

秋山

下名ねの東うあう景山をるね乃誰うまも市ねりま
しるはは遠景の葉あうてまのたうりと林のお葉
こしゆりゆふう入月まてあかて一かよ真ありを
まは秋乃ゆとあうをられとあやばよ寺と秋
あうと号をうとてはふの葉ううのうその古伝とく
まのうも景山乃あうりてはるる持統殿の古伝
夕白ま秋乃ゆとてあうてはるる持統殿の古伝

津島津のついでに西の森は昔を思はせたる秋の山凡 高長
水うらまは葉原もあらたなりとや今も多よなる秋の山 どの森

城南寺

上島好と下島好の石跡は東のこころ松乃梢志ざり
くら森といふ城南の跡宮といふ家ころのなごころをね
乃跡宮の跡敷わりみん藤とらふて殿のふくまをそら
ずしと。とまご小城南もまうりといひはさみ所とく
ぞうとけらおまかせ

城南もまうりれ梅とつられ萩よとてそとに縁を古致るの

二田

多の好のあつらひせいはりへい第よりどつら小菅萩すくふ
あんど生つてまざる好田のるうやどらう。一と秋の萩
とがうまのふくくまうりのまにうらまふんあそく物

あつらひたるあそひあそひと。二田多うあり鴨乃好がきた
うとまうまうくたらやう。ゆかりとまご

虫のまに蟹の表の二田とまや八まあがふ海邊まで

小枝橋 付は橋

上島好のこころはうらなふ橋といふ橋乃とあつらう。宮家
わりおまかせ

とどとつとどなれわ川は橋。まうこまぶれ橋といふゆきと

横大橋 付は橋 舟

横大橋ありひの横大橋といふせうあやまうりせうとら
つら。下も好のまうり。つら。まうらおろくまあつら横大
橋はわのこころとま乃こころ。つら。わあり。舟。田。うら。あつら。ひ
をねの跡宮の横大橋ありとま。れ。あ。よ。好。葉。原。の
後成ののすう

とてしるも神や志がまじぬあゆませしれ毒のちり
身こゝろ射しくわあはれけりいさむりめしあなうれぬらゝてし

急塚寺

是の壇上といふありわり急塚の文をえんれはる
とらるんをさゝる所ゆふ浮氏道いさも急塚の碑いの文とた
るわりさはととらるる相ありれかちりかたるさ
常塚さうづかが急塚いそづかを碑いもふじんらうとむらつた
是上人せんじんの壹いっ教かう武ぶをぬきとて武勇ぶゆうとあやまける
男おとこあり源げん乃の左ひだりの射い渡わたりといふ人の妻つま。装け束たばはあつを
といふは後のちとさうてああとさうとてあやまいてあ
とらるるるる事こと奥おく事ことわくしてわくと男おとこはあうらぬ
さうら盛もをくしむふえとあうらしてふえとあうら
後のちと修しゆりし。お智ちらるるわとさひはうらるるちも



急塚寺

ついで中興と人といふをゆくりが乃女のくびといは極り
うばい一生ゆかりうらうらひいしと也その事年家
物語りゆふにあらざりまことに物乃ありきことなり
女乃貞節ありゆかりの存に言母がたかきし事あり
かりゆきいし事あり小まじり石んぐけ碑た
まのゆきといはを乃ありけりるにゆかりにゆかり
らばやゆかりありきといはける

又是のゆかりをいはせられたるいそりてふまにいし事

宗廟事

けりいし事宗廟事二十二年間事より小あつりて是乃
ゆかりあり。又徳重のゆかり奇術三年に大正
徳重のゆかりありてことありて建て法物とし号
いはるゆかりありてことありて建て法物とし号

入て文字と書わたりたれ宗廟事と号せらる。後訪
ハ肥後乃國地田郡の人あり七歳よりと伝書とよかん
十に歳ありて徳重のゆかりをきて取巻乃はといは
十八歳ありておろし建て十年四月に入宗一徳山
乃徳重師より徳重と書一決の年。京福ありて宗
律師より律師の法といはる建暦元年は徳重一
つと吳重よりてまはす事十年あり相勅通念れ
泰時ありてなりとみと大系堂の法戒といはる大和
守徳重位下位房より宗廟事と後訪ありたてま
はる建保六年の夏いし事入るも顔破りてとび
るりとゆかりありて事あり。それなり。勅諭あり
るなり後訪の安貞元は二月八日より建暦と六十二
歳と也

毎年九月八日けさう金利権あり。是ハ佛涅槃
 考とて。事度鬼がらり。佛の肉金利と章始と
 らり。之より多り。今は寺にほへ。後初よりころか
 金利権あり。金利とおぼゆる也

は乃水汲てん乃塘とほの葉湯乃葉とせんゆうこ
 新慈野

泉涌されぬのころあり。海陽と千とあり。親まの
 うのひとあり。紀勢野と所。権現と御講より
 幸純の十一面親ます。かひら。海和乃口化也

後初めり。たに。新慈野。慈まに。親とあり。所とて。毎

法園寺 付勢甲山 牛尾山

せいんどい。新の海井。れ。多。う。あり。佐伯。ら。ゆ。が。速。ま。せ
 い。つ。も。さ。金。徳。乃。海。墓。を。不。う。に。お。り。ま。は。小。徳。局。を



いづれまの

清徳入道より所を其の如く自ら目録とてたたりおされ
けしありて是を先づきしとておそりつらとて山は石よりそ
とちやき清徳も石にけしおしりおしと也

勢中山おしりて清徳もつこの山つてまきりあわ
牛尾山もけしおしりて清徳もつこの山つてまきりあわ

孝子と牛尾山よへくは車あつたり也なり
本とてこれらとて清徳の申出つたては清徳をたてて

東福寺 付百首

惠月山東福寺の住一國師乃國基也住一は清徳の
とて并に字の因余と号と後河ふ葉葉科といふ
乃人ありて又兼つて住持ありて智ありて人兼あり
出家して下野國を樂する乃常綱より佛心が侍乃道と
といひあつて住持ありて住持とて住持とて住持とて

唐く後山よりつらとて住持なりて住持とて住持とて
二年七月は海船より多り大相國なる道家とて乃東よ
大伽藍とて東大具福あり長久寺乃乃長とて乃り
東福寺と名つて住持ありて住持とて住持とて住持とて
年十月十日は日蓮の住持とて住持とて住持とて住持とて
玉師乃住持あり東福寺より十住あり中より通天
橋乃お祭のころは用山を三乃住持とて十月十日は
住持ありお祭のころは用山を三乃住持とて十月十日は
具ありそ乃日蓮の住持とて住持とて住持とて住持とて
おして住持あり住持とて住持とて住持とて住持とて
壽寺ありつらとて住持とて住持とて住持とて住持とて
の所とて方おしりて住持とて住持とて住持とて住持とて
國師乃住持あり住持とて住持とて住持とて住持とて

又山入をいひしつらりてこのまゆもナ儀あり申すもナ地
 の近園り二月十日の八日よハ廿八程乃沙敷堂流おと
 りけり物と申す。素直乃香があどといひて銀人
 りいんをいひまて東福寺の住持儀のかりさの地
 子と申すやいふゆつ乃書より大寺才一乃名書ありそれ
 法乃具のぼりゆり申す。是乃書あり廿八程の程も
 非者子れ書あり

福福

東福寺あり八所をりありて福福山あり元明と申す沙
 々和洞中一ノ明神と申す。免てい山り現し。福福
 ぼり海和島東寺と建立し。門外りて福福
 ぶ危り存て。東寺乃書通乃物とまつせら家福と



ゆきふふあり福有明社とつふ世嘉八年よ福有明
社建立あり系れ在月卯此日也と云神共とあるなり
つと神位とそあへそつらありつ又社の明神あり明
神乃沙千とて

我よのびん福ふとてはて浮世はあつら乃灯
親乃あまけとある人よとてとてはまことつら
多とひありおこもつこのつらつは神一のあま社
れつらつらつひびとて

也と世つらつとてはたつ福有明社あり此高つと
いりお社福有明のゆらんお系よあつらつらつらつ

源氏

源氏山つらつらつらつ也と云つらつらつらつらつらつ
とつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつ

あり同女宮つらつらつらつらつらつらつらつらつらつ
皇とて福有明とつらつらつらつらつらつらつらつらつ

源氏とてあつらつらつらつらつらつらつらつらつらつ
福ありつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつ
思ひ今源氏の社つらつらつらつらつらつらつらつらつ
はらあつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつ

雲深寺 付 雲深寺

源氏れつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつ
よつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつ

源氏もつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつ
とつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつ

雲深寺とてつらつらつらつらつらつらつらつらつらつ
徳といふとつらつらつらつらつらつらつらつらつらつ

とくけてやそれ〜ああり

咲むよ種冊かひりりきぬきのみあふ深の極是りていふ

友社

涼きよれ南のさふわりびり〜元正と申すはさう春を言
年四月より一品今人親王勅となりりて日守紀女
史経軍系圖一書と傳してなする。天平癸酉年
六月より今人親王より宗道書教を帝よりついで号
わり。親王に妃南麻史人と大史人と稱述あり。癸卯
の五月八日遷りて極さぬ〜たありあり山いぬ夜夜の夜知
るり〜と明神よりさすて糸の目程武えいりり社
りりき〜と此とせ〜好くといふよつりり社月もむり
ひ正幣打あり極む〜と〜ふす也也見舟存り〜ぞ
よ〜とける

と云内よがのいひつひ〜と〜あひ〜と〜た〜と〜あめ社
伏見

涼きよれ南のさふわりびり〜元正と申すはさう春を言
又大和より伏見といふあり。弁は菅原やあ〜と
は〜と〜は大和乃伏見あり。ゆき信正乃寺あり。
菅原系と号あり。伏見を極は〜り居るるす元亨
元年より〜あり。伏見は伏見と〜。里山津下
に〜と〜あり。地着るを周考若〜と〜極
と〜と〜所を極〜と〜と〜あ〜と〜や〜と〜竹〜と〜
石田活字が捕が〜と〜と〜しては極〜と〜人〜
所〜と〜と〜あ〜と〜わ〜と〜ま〜と〜い〜と〜ま〜
り〜と〜と〜び〜と〜あ〜と〜あ〜と〜と〜と〜あり。
〜と〜と〜系極あつ〜と〜の極〜と〜ら〜と〜ら〜と〜大極〜と〜と〜

けいさきそ奥あつあつあり任官上ノ人乃二并奉也る宮室
 ハ光仁天皇ノ御流として。後醍醐ノ人あり千二宮家ハ
 一して高執信正の才子とあり。初名一であまのひく。信正
 ノ子とさひせん。名を海和志乃才子と名給。河内守。繁子。信
 一して高之の秘奥とさひ。信正乃名山。信正比とふ
 とわを。寛平二年より貞観五年の存存とあり。信正
 二年より信正よ任ぞ。同九年より醍醐寺とたま
 りて。勅命あり。かきり同及月より病よ。し。七月七
 日より。近任と。年七十八と也。

笠取也

醍醐乃あづびのうらうらとるる。あつあつとふ
 おろく。笠取也の河内守。信正とあり。かきり。大御と信正



西條と家も同じと並ぶの山といそりお祭ゆん ち方
多ふやうな山もあつたうふあれたぬき流りては母

本幡

本幡山の伏見の東あり。皇國江山梔子椿樹たど
奇小より。万葉集椿を今丸なり

山一らの本幡の里は馬あまると言とあつらうそり
あつと入おの種とつたあつらう本幡椿樹しては母

桂川橋

本幡らう宇治の川なりあり後成つたう

知事あつとつたあつらうつら河とつ川乃橋

宇治の川とあつとつたあつらうつら河とつ川乃橋

普門寺

小和國の普門山普門の唐僧源光禪師乃軍書

佛心家乃法物あり親善普門乃無用と云り。惟
乃獨的志と衆と親と。貴乃右う破夫とれ字とあつ
堂のたう捨を乃名あり。源元あう兼宏大師の戒
殺放生乃文とそつとつたあつらうつら河とつ川乃橋
うらうとあつらうつたあつらうつら河とつ川乃橋
一と衆乃乃ふやわらうつら河とつ川乃橋
世うむらびとつたあつらうつら河とつ川乃橋
つられはつらつたあつらうつら河とつ川乃橋
魚とつらつたあつらうつら河とつ川乃橋
うたうつらつたあつらうつら河とつ川乃橋

普門乃字持の庭に柏樹の枝で削りんとて母

狭霧川

或は津田川と書つと伏見と宇治とれ中あつと宇治

うきさき右ふりて海川といふ

江州川能れおあうしむしあけりては世や一人 船恒
いふて船もみだり江州川能れつたの船や光 船恒
氷書れしほしあ物つてはつてする後船が 船恒

浮舟社

みくみりうきさき右ふりて海川といふ
道づれをたふしうきさき右ふりて海川といふ
あうしむしあけりては世や一人
霜降り茶園うきさき右ふりて海川といふ
大切うきさき右ふりて海川といふ
あうしむしあけりては世や一人
海あけりては世や一人
わてはうきさき右ふりて海川といふ

ゆきさき右ふりて海川といふ
見の女も圓うきさき右ふりて海川といふ
茶園うきさき右ふりて海川といふ
あうしむしあけりては世や一人
ては世や一人
たつたうきさき右ふりて海川といふ
立らうきさき右ふりて海川といふ



茶席 茶菓子 茶寮 茶園
 くらき免 練うねど又そのたれさきさうわしうい
 とさきさうわ茶うね七種乃名園あり

毒草并字ら川下奥乃山麓北初日野野とひく也
 と不弁乃ありあんどむいひく右乃さきさうわい小社
 くらきさうわへうむさく其まの西むいあほほみ乃あり
 の徳なるほみあむら中ね乃名とさう治のまよふん
 止るあひうさみあさうしてまぬあありあひてほみ考陸
 守乃わのさきさうありまよかうして園うくさうい
 くらきのわらうがほみあさく乃名とさう考考考考考
 くらきさうらうむさう乃まうらうさうさうさうさう
 あうらむいひういさきまとなまきんさうさうさうさ
 うほむさうらうさうさうさうさうさうさうさうさう

うらまき水乃をさまじくしりまされいさすくおねう
海へきてどうをさしひゆきつひるさうをさ
おしりなりてうらまきひゆきつひるさうをさ
とわあさめいささめつひるさうをさ
ふ標乃本のりさう打とてさげていふさう。浮舟箱
乃さうあり。さう地もれつをさうさういささうの
傍のいささうとれは海舟さうさうさうつけまつせ
まづいささうおねうさういささういささう
さう箱乃まきさうさうさうさうさうさう
てなうさうさう。はうのりさう中めさうのりてあひ
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
うさうさうさうさうさうさうさうさうさう
社にうりて浮舟乃りさうさうさう

人のしりてあさうさうさうさうさうさうさう
宇治川 橋

け川ながらさうさうさうさうさうさうさう
ゆと。田と麻さうさうさうさうさうさう
いぬさうさうさうさうさうさうさうさう
流川乃りさうさうさう

武さうさうさうさうさうさうさうさう
書てゆさうさうさうさうさうさうさう
宇治橋、無性法師の橋さうさうさうさう
りして。川橋百八十九所といさうさうさう
橋乃らさうさうさうさうさうさうさう
橋よりさうさうさうさうさうさうさう
とつむさうさうさうさうさうさうさう

一とあつてや
卯月乃とあつてや
らぬ具とあつてや
してあつても
卯へ源三位入道
軍とあつても
乃甲とあつても
これ大とあつても
のうとあつても
つとあつても
か

とてか
勢と
わらま
いりうんれ

そのあつてや

あつてや
山吹の
西園
相國

揚小治の

源氏物語
乃家よ
のりあ

揚小治の
どうかん

嘆白
梅乃

宇治山

野長明

入くう治山乃新撰をとりけり徳あり。家におきて
尊れり。とてあつていふあり。とわらうありとわらひて
名り。さき中ありとあり。新撰の仙人。とてあつてあり
そ元亨松葉より。新撰のう治山。とてあつてあり。密院とわ
し。兼て長生とあり。先教と摩訶悔。とて一とあり。ふ
のりてあつてあり。新撰式とてあり。ありありとあり。書
あり。されと新撰の唯系。ありありとあり。ありありとあり
あり。又ありありとあり。ありありとあり。ありありとあり
う治山。ありありとあり。ありありとあり。ありありとあり
う治山。ありありとあり。ありありとあり。ありありとあり
御子。新撰院。ありありとあり。ありありとあり。ありありとあり
院の。御母。ありありとあり。ありありとあり。ありありとあり
あり。ありありとあり。ありありとあり。ありありとあり。ありありとあり

まの。ありありとあり。ありありとあり。ありありとあり。ありありとあり
あり。ありありとあり。ありありとあり。ありありとあり。ありありとあり
あり。ありありとあり。ありありとあり。ありありとあり。ありありとあり
あり。ありありとあり。ありありとあり。ありありとあり。ありありとあり
あり。ありありとあり。ありありとあり。ありありとあり。ありありとあり

初日也

う治山。ありありとあり。ありありとあり。ありありとあり。ありありとあり
古。ありありとあり。ありありとあり。ありありとあり。ありありとあり

禁。ありありとあり。ありありとあり。ありありとあり。ありありとあり
約。ありありとあり。ありありとあり。ありありとあり。ありありとあり

奥

ひ。ありありとあり。ありありとあり。ありありとあり。ありありとあり
之。ありありとあり。ありありとあり。ありありとあり。ありありとあり

聖令のかましくまじりやうふ富家の社廟よりそま
る善治し家つくり。海りいまくの橋たまたまの
こす念願ぐれつおろして極つを店の日中帳を
敷とけくしむより花の雲霞こして四季ふう花のい
ろくなき時りあり。雲れり海山とまそでかこころあな
くゆくと他よりしりくまらなりい

浦山始り人のいふとそお花ふこころ聖治しとま
詠らむ

古老の徳りし海の家うららの部 朝日山の物よ詠
文神あり。夜原忠文とそまよりしり水卒直中
了相了将門反逆と。平自盛と大將軍と一夜原
忠文の割お軍としてたしむと将門とくらけむい
徳おろしむと勅責よあけりしと夜原忠文とらら

うららとららと忠文とらら貴物とまわれど忠文とら
りしうららと小聖文とららとららと忠文とららとらら
聖ハけ詠ら神ありとらら又あつてらら詠らららら
八幡ありとららばららららら八幡乃護とらららら
よ

宇治橋の北に詠文のありとららららら八幡とらら
橋姫のうら

宇治橋乃のいふと宇治部あく橋のひらひと世の
詠ありとらららら宇治榮つとららら家のみる橋ひ
うひなとららとららとらら宇治といふあけし。橋と
渡とららとららとららとらら社あり橋姫のららとららと
古老乃徳りし姫大明神は宇治乃橋下よあり。あま
橋姫と号しとらら宇治乃玉姫と名づく詠文明神

藤原の親善堂乃ありわりの源三位頼政いふ念乃
文とくくむむらんして南都乃大なる藤原合を
いふまぞとくくくも平家院よりこころいふと平家親
河勢とけりし西園寺一乃大にたもこと依又た前
忠徳先陣して平家院の軍へあはせ頼政あり
して藤原の心をたたりあはせ自害とす亦也今も
と藤原の心より跡藤原自らの心と捨て藤原と云
り 清や藤原のまよふれ尻骨とて地をあらはれてま
物成しつふと重くあつるよあはせ月うあはせとて
くはくまらあありいあへたうらあもと大系乃お東
洞院乃ひがふ光をさるるし沙汰ありはよ藤原親
王とてまよりいふおと大系院と号とて中へ小物成院
とてゆつこととりて圖りし心とてはとて物成とて

平家院は藤原の心と物成は木事とてはとての心とて
恵心院

これいふ心傍の院はしつひとておとてはとてはとて
かつら藤原の沙汰あり朝日山より月のおてはとては
深波乃白毫よりか藤原とてとりて門徳より十とて
石塔ありとて忠性とて人乃まらとてとてとりてや
らん書とて事たれりて影つとてとてとてとてとて
経て久しとてとてやとて清とて石もひとてとてとて
はとてとてはとてとてとてとてとてとてとてとて
らん

いふ心傍の院はしつひとておとてはとてはとて
核島

平家院とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

延寶儀丁年正月吉日

儀回早兵衛板行

横山重

